

あとがき

教育現場は昔から変わらない側面と、時代と共に大きく変わる側面がある。本「小学校教員調査2021」は、その変わらない面と変化する面の両面を、小学校教員に対するデータで実証的に明らかにしようとした。

小学校教員は、6歳から12歳の子どもを相手にするという点で、いつの時代も変わらない側面がある。小学校教員の特徴は、いつの時代も「子ども思い」ということである。そのことは、今回のデータでも随所にみられる。

一方、時代と共に変わる側面として、教育のデジタル化、様々な教育改革への意識、教員の多忙化がある。

とりわけ、2021年4月に小中学生一人一台の情報端末（タブレット、PC等）の配布が開始され、教育のデジタル化を実現する環境が一段と進歩した。それは、新型コロナの蔓延、学校の休校という事態も相まって前倒して実施されたものであり、情報環境も整わず、文部科学省や教育委員会の指導も手薄のまま、現場の対応が追いつかず、混乱や教員の中での戸惑いも起きた。

そのことをどのように考えるかの専門家の見方はいろいろで、新聞の取りあげ方や論調も様々である。今回の調査では「一人一台」の情報端末で「何ができるか」と「教育活動に必要か」を聞き、さらに情報端末の「活用のしやすさ」を教科別に教員に聞くことにより、教育現場に即した考察をした（4章、5章）。

文部科学省が提案する様々な教育改革（学習指導要領の改訂、新しい教育内容、アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメント、教科等横断的指導、英語教育等）に関しては、教育委員会や管理職は教育現場に定着させようとするが、現場の教員はそれを受け入れつつも、これまでの教育現場の方法に合わないものに対しては、スルーする姿勢もみえる。その実態に関しては、詳細に明らかにした（6章、11章、12章）。

新型コロナ禍やデジタル教育の進展で、家庭の教育環境の社会的格差の拡大も懸念される。その実態と学校や教員に何ができるのかも、詳細に考察した（7章、8章、9章、10章）。

今回はあらかじめ選択肢を用意する質問以外に、教員の意見を自由に書き込む質問を多く用意した。教員の思いがその文章によく表れている。特に「地域との連携」（13章）、「宗教に関する一般的教育」（15章）、「これからの小学校教育のあり方」（16章）に関しては、自由記述の分析から教員の意識や思いを明確にした。

「現代の子どもの特性」（2章）、「教科書の使用状況」（3章）、「教師の多忙感」（14章）は、小学校教員がいつの時代においても、また今新たに直面する問題である。

短いコラムも9つ掲載し、データの分析を補った。分析の背後にある、分析者固有の視点を示した。

最後に、資料編（調査票見本、基本集計、自由記述抜粋）も掲載したので、元データからの考察もしていただければと思う。

本調査にご回答いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。本報告書が、多くの方に読まれ、これからの小学校教育の改革、改善に役立つことを願っている。